



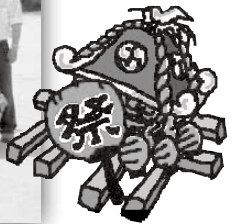
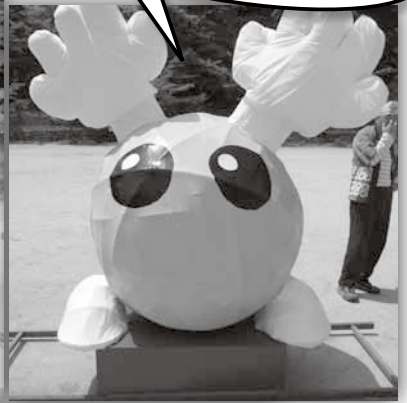
おちほ

第64号 平成21年6月20日発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 中嶋貴一郎

みんなで

ワッショイ!

氏神まつり!!



毎年恒例の氏神まつり、今年も、五月一日に行われました。当日は見事な文字通りの「五月晴れ」汗ばむほどの陽気です。こんなおまつり日和ですから、自然とテンションも上がってきました。お揃いのハッピを着込み、はちまきを巻いて、利用者の皆さん、職員共々落穂寮から坂の上の東寺グラウンドまでさあ出発です!! それでは今年のおみこしの紹介を。まずは昨年、滋賀県のみ。で、大ヒット、現在も大人気の「しったかぶりカイツブリ」つばらな瞳がとってもキュートです。ちなみにカイツブリは滋賀県の県鳥です。ご存知でした? 続いては、今年で生誕30周年、パレーポールのキャラクター「バボちゃん」です。大きな手がすべてを受け止めてくれる。最後は開局50周年の関西テレビのキャラクター「ハチエモン」です。怒った顔も素敵。どれも職員が毎夜せつせと、利用者さんにもお手伝いしてもらい完成させた力作揃いです。さて、これらのおみこしを担いだり、引っ張ったりしながら「ワッショイ、ワッショイ」。東寺地区の皆さんにも道沿いで、「頑張れー」「すごいなー」など声をかけていただきました。ありがとうございます。こうして今年最初の大きな行事も無事終了。楽しい時間を過ごすことが出来ました。今年も利用者の皆さん、職員共々、落穂寮をよろしく願います。

いま、わたくしであること

理事長 山下陽一

「土と色」展

二〇〇九年三月、京都市美術館で「第十二回 土と色 ひびきあう世界—京都展」を開催しました。三年を経て同名展の開催でしたが、今回も多くの方々に来場いただき、主催側も多く得るところがありました。この展覧会のポスターになった絵の制作者は湖北まこも（旧湖北寮）の利用者で、二十五年前に落穂寮で生活していた春代さんです。彼女が開催中会場に引率の人とやってきましたがすっかり歳を取ってはいるものの、腰をひねって片足をはね上げてはにかむ仕草は昔と少しも変わっていませんでした。

彼女の絵はクレパスをランダムに塗り込んだ作品で今回の「土と色」展のポスターに使用しましたが、サブタイトルとして次のように白く小さく書き入れました。

いま、わたくしであること

このことばは彼らの表現活動の紹介を積極的に推し進めていく上で「いま」私たちが直面している問題と今後の課題において軸足となると考えているからです。

作品にとっての「いま」

「土と色」展は一九八一年（昭和五六年）、国際障害者年記念事業として、京都市美術館で開催されました。当時の作品展の捉え方や作品に対する評価は未形成で、「職員が遊んでいる」「知恵遅れに文化は存在しない」等々の否定的姿勢から「これこそ生命の発露表現」「芸術の根源」等々の支援派まで、造形の理解の振幅も深度も様々でした。そのなかで継続してきたのですが、実施した側も時代の枠組から逃れることができずこれらの意見に対して柔軟で適切な対応に欠けていたこともありました。加えて各方面の誤解など相まって、制作現場では口惜しい思いをしながら長年黙々と取り組み、その結果としてつい最近に評価を得て「いま」に達したことも忘れてはなりません。その観点から「いま」の作品制作が本当に作者の生き様に沿っているのか、また、鑑賞する側は「いま」何を見出さなければならぬのか常に問い直されているように思います。

「もの」としての作品

特定の作品はギャラリーで流通し値札が付けられ販売されています。なかには外国から美術品取扱レベルのハイグレードな梱包が施され輸送されますから、高額なものになっているものもあります。国際的ブランドもあり

インターネットによる通信販売などによる大きなマーケットになっているというのです。

わたしはこのように作品を「もの」にしてしまうと、作品の背後にある「意図しない世界」の奥底に潜む「妙」の抜け殻だけになってしまっているのではないぶかっています。

私たちの身近にいる作者のもの創りの風景を見ると、特別な場所で制作されたものではなく生活の一部として行っているものがほとんどです。ある制作者の作品は生活の隅々にある薄暗いジメジメしたところでこっそり作られたものもあります。作者は人に「アッ！」といわせてやるうなどという意識もなく中には何かを作るという意図さえないまま材料に向かっている場合もあるでしょう。これはちょうどわたしたちが美しい風景を見たときや心静める音楽を聴いているときと同じようなうっとりして我を忘れたところで作品創りをしたり、また彼ら特有のなんかん発作を抑える薬を服用しながら気分すぐれずボンヤリしたまま粘土を手なぐさみにしている場合もあるでしょう。そんな条件のもとでの作品は意識にたけた私たちではとても理解が及ばない安逸や逆に深い混沌の世界を垣間見せるているようです。

一期一会の妙

「わたくしであること」という日本語は翻訳する場合にびつたりする外国語がなく日本独自の感性によることばということ。ことばを感じようとする気持ちを鋭敏に研ぎ澄ませ向き合うことにより始めて伝わって来るもの

かもしれない。

一つひとつの展示作品を「もの」として対面するのではなくその作品を紹介して作者と鑑賞者双方が対等に「わたくしのこと」や「自分自身がたどってきたこと」として自覚的に「出会う」ことが作者との共感の入口に立つことではないかと思えます。展覧会に来ていただいた皆さんへの「ごあいさつ」の中で、土と色展は作品の一つひとつから「一期一会の妙」として作者の自由で奔放な表現を感じ取っていただきたいと述べましたが、これは作品の前に立つて無条件で「コリヤ、えーなー」と感じていただくことを願ったものです。

著名なヴァイオリン演奏者が名器ストラディバリを使って演奏している様子にも似て、「ひと」と「もの」とが一体となって感動を起こさせることを想像していただくと思いますが、作品を鑑賞するとき「もの」として純粹の美を発見して作者に接近することは「いま」でもないことながら、「いま」の「わたくし」が自己をしっかり持つて少しの間も挟まず一体になることの中からうかがえる風景があるのではないか。そのときはじめて作品に共感でき同時にその真髓が向こうからやってきてそれが私たちの心のヒダに触れることになるのではないかと思っています。

多くの作品は造形的に具象世界を現しておらず慣れないかたちばかりですが、作品を紹介して「出合い」により独自の世界が広がる機会を今後もしるんな場を得て紹介し続けていく必要があると考えています。

生活施設の今後

落穂寮施設長

中嶋 貴一郎

近年、落穂寮のような二十四時間体制の障害者の生活施設のあり方が問われてきています。しかしこれは今に始まった事ではなく随分以前から施設は常に批判の矢面に立たされてきました。その多くは、施設は閉鎖的だ施設には自由がない、個人の意思が尊重されないなどといった意見で、しばしば「施設は解体すべきだ」とか「脱施設化」と言った議論が交わされてきました。私はその意見を聞くたびに疑問を感じずにはいられませんでした。平成十八年に障害者自立支援法が施行される以前の四、五年は「障害者が地域の中で暮らすことが進んでいかないのは、生活施設があるからだ」と言う批判が大々的に展開され、「脱施設化」論が浮上し、会議のたびに私たち生活施設に勤める者は批判の矢面に立たされてきました。結局、それが平成十八年の障害者自立支援法の施行へとつながっていき、今な

お、生活施設の縮小、脱施設化論は展開されてきています。

私たちは常に、落穂寮で暮らす人たちが、生まれ育った地域に帰りそこで一生を終えることができたら、あるいは希望するところできたら、あるいは希望するところで就労がかない、暮らしていけたらと思ってきました。その思いから、保護者と向き合い、企業を回り、地域の人と対話し、行政に働きかけ、その結果、多くの利用者の方を送り出す事ができました。しかしそこにはいつも大きな壁が立ちふさがっていました。地域の中の受け皿のなさという物理的な壁と、障害をもった人への理解のなさという意識の壁でした。施設に勤める人ならみんなそうだった経験をし、そうだった思いをしていました。そこに「施設があるから地域生活への移行が進まない」と言った批判や論点を向けられると、あまりの本末転倒に怒りさえ感じてしまいました。今何が必要で、何をしなければいけないのかを考えて欲しいとも思っていました。

機能は細分化され、分業が進み、事業所としての形態の中で、多くの事業体が参入、整備されてきました。その意味では受け皿の多様化と増加を見たと言えると思います。が、重度、最重度の方にとつては、あまりにも不十分と言わざるを得ないし、保護者、家族の負担はむしろ増加したと言えるのではないかと思える。さらには、施設の機能が細分化したことに対して、それらを総合的にコントロールする主体が明確になつていない弱さがあると思える。

このホームを支え、支援し、ホームの利用者の方に病気も含めた問題が発生した時、施設が受け入れる、問題が解決したら、ホームに帰っていく、その機能がいつでも働いているから、各ホームは安心して運営していけるのだと記されていました。当時の日本はコロニーと言えば山奥の広大な土地に大規模な複数の施設の集合体を作っていましたから、日本の発想の貧弱さとその格差に驚かされましたが、かつて糸賀先生がヨーロッパを視察された時、それに近い光景を目にされたのではないかと思います。糸賀先生が目指された地域コロニーとはそれだったのでないかと、私なりに思っています。

これからの施設を考える時、生活施設の総合的な機能を生かして、地域の中で自由に活用できるセンタリー的な役割を担っていく方向性をもつてもいいのではないかと思っています。現に今、落穂寮には、短期入所で在宅の方が多数利用しておられますし、ケアホームを利用しておられる方も施設利用をしておられます。その意味では四十年前のヨーロッパの姿に少し近づいたのかと思っています。

近年の施設を取り巻く情勢に私なりの思いを書きました。



▲小山 st と 絢也さん

京都保育福祉専門学院から来ました、田茂井一成です。私は障害をもった方との関わりは落穂寮へ来るまでは全くありませんでした。ですが自分自身の成長、チャレンジの場として、この仕事を選びました。対人援助という人と関わる仕事は大変な中にも、喜びがあり、とてもやりがいがある素晴らしい仕事だと思っています。

そこへ落穂寮を学院から勧めてもらい、やってきました。落穂寮で生活されている利用者の方々とはとてもいいいきいきとした姿をしておられ、その姿を拝見した私は心を強く打たれるものがありました。落穂寮で生活している利用者の方々には何が出来るのだろうか、また、利用者の方々からどのようなものを得られるのだろうかという興味を沸かされ、落穂寮への就職を決めました。



▲亮さんと坂田 st



▲奈々さんと大久保 st

初めまして。このたび4月より追手門学院大学を卒業し、落穂寮男子棟で勤務させて頂く事になりました。井上岳治と申します。

私は、小学生の頃から地域福祉の中で育ってきました。いつの日か地域福祉の世界に飛び込んできました。在学中に「ノーマライゼーション」という素晴らしい思想に出会いました。このノーマライゼーションの本当の意味を知るために、日本の福祉の原点である、この滋賀で、そしてこの落穂寮で勉強していきたいと思っています。

初めまして、京都の山崎にあるキリスト教社会福祉専門学校(現大阪保育福祉専門学校)を卒業し、落穂寮にやってきました。今年度新人の小山敬子です。京都生まれ、京都育ちの京都っ子です。ですが、京都についてはあまり知らず、離れる事になってからよく観光するようになりまし。京都の事なら、少しは知っているのも聞いて下さい。



▲元二さんと井上 st

落穂寮で働こうと考えた経緯は、日本の中でも知的障害者の支援に早くに取り組んだ滋賀県の中で、長い歴史を持つ落穂寮では勉強になるものも多いのではないかと考えた為です。

落穂寮で働こうと考えた経緯は、日本の中でも知的障害者の支援に早くに取り組んだ滋賀県の中で、長い歴史を持つ落穂寮では勉強になるものも多いのではないかと考えた為です。

2009 新人紹介





遠足に
里山しよんらい公園

4月24日。この日は、遠足へ行きました。例年ですと「お花見遠足」ですが、今年は桜の花も散ってしまい葉桜になってしまいました。その為、今回は歩く事をメインに「遠足」となりました。

この日は、お天気にも恵まれて快晴の青空でした。グループに分かれていざ出発。それぞれのコースで里山しよんらい公園を目指して歩きました。

お昼前には、公園へ到着。長い距離を歩かれ皆さんお腹ペコペコの様子。お昼ごはんは、中華弁当とデザートのでゼリー。よほどお腹が空いていたのか皆さんペロリと完食されていました。とても美味しそうに食べられていました。昼食後は、公園内でのんびりとすごされています。

帰りも来た道で寮まで頑張って歩いて帰られました。一日おつかれ様でした。来年は、きれいに咲いた桜の下でごはんが食べられるといいなと思います。



↓ やったー!! 着いたよ!



去る四月二十四日に、毎年恒例のお花見遠足で十禅寺公園まで行ってきました。しかし、ここ数年問題になっている温暖化の影響が、お花見遠足にまで及んできています。数年前までは四月の中旬でも散りかけていた桜がかすかに残っていたのですが、もう今年はずっかり散り終わり、新緑の中の遠足となりました。

😊 喜だ! 桜は? 遠足だ!!

↓ みんな笑顔で ハイチーズ



天気にも恵まれ、歩くスピード別に4組に分かれて出発! わずか片道四十分ほどの遠足ですが、いつもの歩行とは違った、季節を楽しみながらの歩行となりました。満開の桜は見られなかったものの、八重桜、藤の花、周辺のお家には色とりどりの花たちも見られ、とってもカラフルな景色を楽しみながら歩くことが出来ました。公園に着いてすぐに、みんなが一番楽しみにしているお弁当です。今年中華弁当。中身も、炒飯・海老チリ・肉団子など利用者さんの大好物ばかりで、食欲も進み、とても幸せそうに食べておられました。食後は、アスレチックに登ったり、ブランコに乗ったり、土手をソリ滑りしたりと、各々がゆったりとした時間を過ごしました。帰りには、近くのコンビニに寄っておやつタイム☆暑いなかの帰り道だったので、疲れきっておられたのですが、中には行き先がコンビニとわかった瞬間から、シャキッと歩きだされる方もおられました。コンビニで思い思いのおやつを購入し、帰路につきました。身体が疲れた分、利用者さんの心の遠足度もきつと一〇〇%になったと思います。来年も晴れますように! :

↓ 一番長いコースを歩いた組



↑ 中華弁当、最高でした♡

↓ スリル満点! ソリ滑り♪



↑ 歩くってキモチ良いね☆



↑ きれいな花を咲かせてね♡

今年の落穂坂の桜も満開でした。落穂寮の敷地には季節を感じるこゝとが出来た花々が沢山植えられています。しかし、一番目に付く玄関前の花壇はと言うと: 殺風景のままでは草がボーボーに生えていることがあります。土に触れる事で自然を感じて頂き、小さな命を育てていく事で利用者さんの心に何か働きかけができれば: と思いい、玄関前の花壇に夏に向けて利用者さんと一緒に、「ひまわり」を植えてみました。言葉では伝えられない「感覚」を大事にして利用者さんと関わって行こうと思っっている今日この頃です。(支援者M)



開寮記念日

一九五〇年五月一日。この日に集った方々は、今の落穂寮の姿を想像する事ができたでしょうか。

あれから五十九年、児童施設から成人施設へと変わり、建物も、



支援法が施行され、『福祉の思想』がどこにあるのか探さなければならぬ時代の中で、落穂寮の基本理念はしっかりと根付いているのではないかと思つていきます。それは、職員の



その中で生活する人も、そして制度も、時の流れと共に大きく変化してきました。自立勤務時間であったり、入浴時間にあらわれていきます。当然のように思いがちなところに、その難しさがあるのです。

そのうち、十年間を共にしてくれました。久保賢太郎君が、永年勤続表彰を受

た。自立勤務時間であったり、入浴時間にあらわれていきます。当然のように思いがちなところに、その難しさがあるのです。



『スキヤキ』をほおぼる利用者さんを見て、あの頃の彼女達の頑張りのお陰で、こうして落ち着いて皆と一緒に御飯が食べられているのだと思えました。

それでは、例年以上に賑やかな装飾をして下さった職員と、絶妙な味付けで美味しい『スキヤキ』をごちそうして下さい。ありがとうございました。



▽新体系に移行して一年が経ち、やつと慣れてきたと思つたら、自立支援法の見直しで変更になり、事務方はバタバタですが、支援方針には何ら影響はありません。昨年の経験を活かして、より充実した生活を提供していきます。

▽生活支援員が増えましたが、それでも勤務時間が短かくならない不思議な現象が起きていると、これまで言ってきました。人と関係を築く事の難しさがそこにあると思ひますが、ひとりひとりがその事を自覚して、少しでも早く信頼関係が築けるよう努めていきますので、皆さんの支援を宜しく御願ひ致します。

泉

木言 風が季節を運んでくる。心躍る時が、やって来た。今年はどう表現できるだろう。上手く感じて、受け止めてくれるかな？ どこが伸びたか楽しみに、じっくりと視させていたたくとしよう。